日本声楽発声学会
The Japan Association for Research in Singing
学会通信
２０１２年１０月２３日　第２３号

会員の皆様へ

理事長　米山文明

会員の皆様、学会通信23号をお届けします。

５月例会を終え、今年の夏も猛暑と地域的な集中豪雨に見舞われ、自然の試練は情容赦なくわれわれ人間に襲いかかっています。しかし、寺田寅彦がいみじくも言った「人類を滅ぼすものがあるとすれば、それは間違いなく人間そのものだ」という言葉が重くのしかかってきます。自然破壊、地球温暖化、大気汚染、原発事故、・・・・いずれをとっても人間の浅知恵が招いた人災です。

本学会活動としましては、５月例会の特別講演で加我君孝東大名誉教授の脳、聴覚、発声、発語に関連した綜説があり、私達声楽発声学会員に有意義な示唆と知恵を頂きました。

現役声楽家のコーナーでは長年フランクフルトオペラで活躍された、吉江忠男先生の素晴らしいシューベルト歌曲の演奏がありました。久し振りに格調高いドイツリートの真髄を聴かせて頂きました。しかも当日圧巻だったのはアンコールで、名ピアニスト、イエルク・デムス氏が吉江先生のためにドイツ語歌詞を創作されたというシューベルトのピアノ即興曲の歌唱でした。恐らく日本でも、世界でも初演の筈です。会員一同大感激でした。

会員活動としましては、演奏部門の理事諸氏が中心になって行われた４回のミニコンサートが毎回大好評でした。演奏に参加された会員も、演奏を聴かれた会員も、それぞれの立場で有意義な試みだったと思います。この試みはさらに工夫を重ねて続行されることが望まれます。会員の皆様もどうぞ積極的にご参加下さい。

８月の研修会も合唱をメインテーマにして、佐々木副理事長をはじめ、川上、小川、淡野、豊田、川村、山田各理事のご活躍で、無事成功されました。

今後の予定としましては、11月例会がありますが、今回芸大の都合（建物の大改修）で会場が使用できなくなりました。それに伴い、小川理事のお骨折りで、臨時処置として横浜国大に変更することになりました。追って事務局から詳細な情報が送られる筈です。ご了承下さい。

１１月例会の特別講演は作曲家の尾高惇忠東京芸大名誉教授にお願いしました。以前から考えていたテーマですが、日本歌曲について、詩に曲をつける作曲家の立場から、それを歌唱する声楽家の立場から（淡野弓子理事）、演奏を聴く立場（作曲、歌唱を評価する）から（これは司会、舞台まわしを兼ねて僭越ながら不肖小生が）、実演をふまえた三者鼎談形式の討論を行う予定です。そして時間が許せばフロアからの追加討論を加えたいと考えております。しかしテーマが大きすぎてどこまで踏み込めるか心配です。なりゆきによっては今後続篇が必要となり、しかも作詩家、言語学者の立場からの参加も必要となりそうです。

最後に学会の組織運営面での大きな仕事があります。新制度による学会規定が平成２５年５月以降に行われることになっておりますので、その前に新制度方式による選挙が行われます。それに伴いこの秋から来春にかけて事務的な準備が必要となります。会員の皆様に事務局、選挙管理委員会などからいくつかの連絡事項が送られてゆくと思いますので、お手数ですがどうぞご協力のほど、切にお願い申し上げます。なおご不明な点はご遠慮なく事務局にお問い合わせ下さい。そしてきたる例会には会員の皆様の活発な研究発表が頂けることをお願いし、併せて益々の皆様のご健康とご活躍を祈念いたします。

会員からの投稿

「歌の集いコンサート」について

相談役　佐藤心乃介

発声は呼吸に始まり呼吸に終る。は名言である。呼吸の工夫は千差万別であるが、常に共通している。このことが歌を楽しくしている。

昨年（２０１１年）「歌の集い」のコンサートを４回聴くことができて、とてもよかった。第１回のラテン系作品の音楽会では、ベル・カント唱法を感じさせる発声もあって、無理なく共鳴させる高音域への共鳴が気になった。また、ドイツ系のコンサートでは、このように表現するのがよいと感じさせるものだった。日本歌曲のコンサートでは、独唱と合唱の違いもあって、これからの日本歌曲は、このように歌唱するのが望ましいと感じさせるもので楽しかった。その他の国々のコンサートでは、英語の歌の特徴もあって、現代唱法による表現と詩に万全を期する発声の工夫が、とても印象的だった。

この年間を通して聞くことができたコンサートを通して、現代唱法による発声の工夫が、これからのヴォイス・トレーニングの在り方と、その研究を深めることの重要性を、改めて痛感させられた。

発表する作品に最適の歌唱を習得するが、各自の課題となり、各自が発声の改善を求めることになるのだが、共通した技術の習得には研修と研究が必要になる。すでに声種の違いにより、発声も違ったものになっている。歌唱者は、自分の良いと思うものを受け入れるので、好きな音色と嫌いな音色が、技術としても表面化することになる。

もう一つは、難易度の高いものとやさしいものとの基準が、好き嫌いで、違ったものになる。このポイントは、言葉による説明で、互いの理解を深めるので、声楽曲のジャンルにも関係するようになる。多くの場合、歌唱者の自主、自発的判断によるので、その発声の工夫は個性的な特徴の強いものになる。

発声の工夫は、どこまでも本人の自発的な努力が核になるので、上達の経過のうつり変わりは、自己評価が基準になる。声楽は特に、自分の体が楽器であるから、客観的に聞いている観客の評価を参考にすることが、必要不可欠になる。しかも、このことが本人の上達の鍵になるポイントを提供する。

ヴォイス・トレーナーの必要性は、この自己評価を高めるためにも欠かせないものになる。

「歌の集い」のコンサートでは、このことが有意義に働いたと実感しました。ヴォイス・トレーニングでは、音楽的なポイントと、発声技術的なポイントについて、演奏会での全力投球でこそ自覚できることが多い。

トレーナーの役割と在り方は、歌唱者一人ひとりによって異なるものになるが、役割りと使命の違いを相互に納得できるのは、音楽会での体験である。

声楽発声法の研究・研修には、優れた歌い手を通して互いに鍛錬する以外に方法はありません。したがって、学会でヴォイス・トレーナーの役割と発声の研究・研修を深めることが益々重要になると考える。このことに気づかせてくれたのが今回の連続したコンサートの企画と実施である。感謝したいと思う。すでに同じ声種の中でも、発声の違いが気になることが起きている。また、合唱とソロでも、その微妙な差が、気になるようになっている。理論の重要性と同時に、実技のすり合わせによる相互の納得は、発声の研究の大きな課題になっている。今回の企画を地道に続け、嫌いを排除するのではなく、より広く、より深く、異質、異論もつつみ込み、互いに研修を充実したいものです。是非続けて下さい。

声楽曲に於ける変わり行くドイツ語の発音

理事　末　芳枝

言葉は、時代と共に少しずつ変化して行くが、歌唱芸術に於けるドイツ語の発音の変化に驚いている。先頃，クリスティーネ　シエーファー（Christine Schäfer）のドイツ歌曲によるリサイタルに行く機会があり感じた事を記したい。プログラムは、モーツァルト、シューベルトそして新ウイーン楽派の作曲家・ウエーベルン、ベルクの作品でオーストリーウイーンにかかわる作曲家の作品群であった。シエーファーは、フランクフルトに生まれ、ベルリン芸術大学で学び、1988年ベルリン音楽祭でリサイタルデビューし、現在までに、多くの著名な指揮者と共演し、オペラ、オラトリオ、歌曲リサイタルと多忙な国際的活動を行っているソプラノ歌手である。師は，オジェー、フィッシャー＝ディスカウ，ユリナッチ等である。

しっかりとした基礎の上に築かれた格調高い歌唱、ドイツ語の発音、解釈、端正なゆるぎない、フォームを崩さない歌い振りは，正に歌曲リサイタルの正統性を感じ、嬉しく感動した。さすがに、恩師である大歌手の師弟であると感じた。シエーファーの歌う明瞭な正当的なドイツ語の発音は、近年崩れ行く歌唱の中でのドイツ語の発音に悩ましくさえ思う私の心に、安らぎを感じさせてくれた。標準語としての正当的なドイツ語の発音は、詩の美しさやその意味する感情や内容を、殆んど動作で表わす事無しに表現されるリートの世界にとって最も大切な要素である。詩を通して、聴衆に言葉のニュアンス、レチタティーヴォ的な要素や言葉の繋ぎによる旋律の流れ、重要な言葉の強調をリーニエを乱す事無く、そして声の響きを大切に維持し乍ら、歌い手の感情を盛る大切な手段である。

作詩者が心の感動を詩に託したその詩に、作曲家が心を寄せて音とした作品に、歌い手の心が触れて再現される。そしてその際、詩と曲を様々な人間感情や、自然界の描写等、詩の持つ内容を画面の設定、色彩、時、季節感等を含めて歌い手が解釈し歌われて行く。そして、聴衆の心に多くの心地好い感情や感動をもたらす事が歌唱芸術である。我々は少しでも高度の演奏を目標として研究を続けているのである。その大切な重要な要素、手段である言葉、ドイツ語の発音が崩れ、日常語そのものの発音で無造作に今日歌われている。この現状を知り考える時が来たと思う。しかし、民謡に関しては別である。何故なら，民衆の中から生まれ、口伝えられ、その地方の言葉が使われ活かされている。これはその地方の言葉の持ち味を大切にする事で歌が活かされるからである。

オーストリー国立音大のリート・オラトリオ科の授業に発音の時間があった。毎週一度、個人レッスンで、教科書や、自分の必要とする詩や、歌詞を持参することも許された。

指導者は、標準語を話す権威あるブルク劇場の俳優であった方々の授業を受けることが出来た。我々外国人は勿論であるが、ドイツ語圏の生徒達、オーストリー人、ドイツ人、スイス人も授業を受け発音の誤りを正されていたことを思い出す。貴重な授業であった。

すべて基本通りに解決は出来ないが、基本を知って処理する事は大切な事であると思う。文学作品、詩の朗読、歌唱芸術に於けるドイツ語の発音は、Hochdeutsch（標準語）Bühnenaussprache（舞台に於ける俳優の発音）の存在は保てないのであろうか。

又、これらは別物なのであろうか。

学会事業から

夏季研修会報告

事務局長　川上勝功

今年は例年にない猛暑日となってしまった８月１６日、１７日の夏季研修会。いろいろ手違いがありまして、米山理事長不在のまま開催されましたが、理事をはじめ、多くの皆さまのご協力のもと無事に終えることができました。紙上をお借りしまして、関係各位に心から感謝を申し上げます。

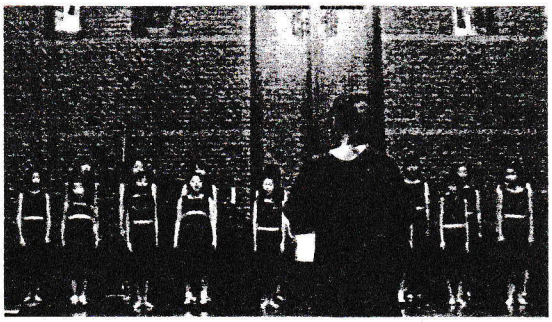
さて、第１日目の研究発表ですが、ある会員からご指摘がありましたように、夏季研修会で研究発表を取り上げたことは記録では殆どありませんでした。しかし以前より申込がありながら、発表のチャンスに恵まれなかった２人の方に発表をお願いいたしました。第１日目は午後からでしたが、一人目は、会員の清野久芳氏、次に会員で能楽師の生駒里翠氏、それと米山理事長のピンチヒッターとして、会員で耳鼻咽喉科医の竹田数章氏の３人でした。

清野氏は『正確な日本語発音の取得方法と鼻腔共鳴の簡単な取得方法について』の発表でしたが、会場に来ておられた何名かの会員、臨時会員から積極的な質問が出されておりました。

２人目の生駒氏の発表は『能楽発声法の芸術性（多様な音質で人間の心の表現を演ずる）』で、今回の発表では映像も使われ、現在８６歳となられた生駒氏自身が、能楽の声をうたい上げていろいろ説明しておられました。我々声楽家にもその声と共にたいへん分かり易いお話しでした。そしてそのうたい発せられた音声は、とても８６歳とは考えられない程（失礼）立派で美しい声でありました。我々にとって最も収穫となったのは、やはり「呼吸」で、丹田をどう使うかをはっきり示して下さったことでした。マイクロフォンを外して、立派な声を聴かせて下さったのです。会場の皆さんや理事の方々からも称賛の声が上がっておりました。

次の竹田氏の発表につきましては、会員の方々から、時折「音声生理学」について、もう一度基礎から学びたいという要望が多々ありましたので、私の方から竹田氏に、それこそ『声の出る仕組み』みたいな所からやって下さいとお願いいたしました。タイトルは『言葉の成り立ちと声の共鳴』という事で、内容もそれに沿ったものでしたが、これはたいへん好評でした。竹田氏はベルヌーイの流体力学の法則も、細長い紙を使って分かり易く説明して下さったりして、発表を終えた後も、聴講しておられた多くの方々が竹田氏を囲んで質問をしておられたので、企画としては成功だったように思いました。

午後第２部の「歌の集い」は、３名のソリスト（杉原かおり：ソプラノ、清田真理子：メゾ・ソプラノ、豊田喜代美：ソプラノ）と２組の合唱団（佐倉ジュニア合唱団、ヴォーカルアンサンブル・ヴィクトリア）の演奏がありました。実はこのコーナーと第２日目の合唱講習会につきましては、私が、初日は自分の指導する合唱団の指揮者として、第２日目は合唱講習会「教会音楽の変遷」の一角を担って『モテットの変遷と特質』についての解説をした当事者でありましたので、この部分につきましては他の理事に記事をお願いして次号の学会通信に報告させていただくつもりでおります。



「歌の集い」から
戸谷登貴子指揮　佐倉ジュニア合唱団

今後の予定

１１月例会のお知らせ

日時　１１月２５日(日) １０:００～１６:３０
会場　横浜国立大学　教育文化ホール

研究発表

・戸谷　登貴子（会員）
幼児から青少年期における声楽発声理論
―　少年少女合唱の実践を基盤として　―

・長谷川　恭子（会員）
終戦前後の音楽教育における歌唱教材に関する一考察
―　読譜指導との関連に着目して　―

・川井　弘子（会員）
声楽家ならだれでも知っておきたい『からだ』のこと
―『ボディ・マッピング』とは何か、声楽家におけるその有効性と可能性　―

特別講演

「日本歌曲」について作曲家の立場から
講師　尾高　惇忠（作曲家・ピアニスト）

現在、桐朋学園大学音楽部門特任教授、東京藝術大学作曲科名誉教授、日本現代音楽協会会員。（特別講演に関しては米山理事長寄稿による記事をお読み下さい）

現役声楽家による演奏とお話し

彌勒　忠史（カウンターテナー）

カウンターテナーの彌勒忠史（みろくだたし）氏は、千葉大学卒業。同大学大学院修了。そして東京藝術大学声楽科を卒業されました。現在、日本におけるカウンターテナーの第一人者として活躍され、欧米でもその実力を高く評価され、特に今年４月のNYツアーにおいて、アントネッロと共にニューヨーク・タイムズ誌上で絶賛されました。また、イタリア／フェラーラ市・県等公認「フェラーラ・ルネサンス文化大使」でもあり、たいへんなインテリ歌手です。今年の５月に神奈川の県立音楽堂で２回程彼の演奏に接する機会を得ましたが、私の印象では、今迄聴いた世界中の著名なカウンターテナーとは、一味も二味も違ったオールマイティーな演奏が可能な歌手だと感じました。当日の演奏曲目は、この記事を書いている今現在手元に届いておりませんが、彼のレパートリーは、ルネサンス期から、現代までと非常に巾広いので、どんな演奏を聴かせて下さるか乞うご期待といったところです。（川上）

11月例会（96回）の特別講演について

理事長　米山文明

以前から腹案として考えておりましたが、今回「日本歌曲」をとりあげてみました。

日本歌曲といってもかなり広範囲にわたるジャンルもあり、考え方も多岐にわたりますが、今回はお客様に作曲の専門家として尾高惇忠氏(東京藝術大学名誉教授)をお迎えして、作曲する立場からお話を聴くことにしました。そして本学会の立てまえ上、演奏する立場を代表して本学会の淡野弓子理事にご意見を述べて頂きます。さらに根まわし役として小生が加わり、「日本語の音響構造(母音のフォルマントを中心に)の問題点と発語明瞭度、そして声を評価する上に必要な聴覚生理(聴取明瞭度)などについての発言と質疑をやる予定です。」その間、随時ディスカッションを交えて進行します。最後にフロア会員からの討論時間も入れたいと思っています。

主題があまりに大きく、限られた時間にどれほど収穫が得られるか分かりませんが、とにかく「日本歌曲」を作り、歌い、聴くための指針づくりのきっかけになればと考えました。そしてこれまで学会が取り組んできました「日本語の発声、発語、教育」のテーマ、本学会のもつメインテーマの歌唱表現、さらにその裏づけとなる理論的研究へのアプローチなどが合成された時、はじめて「日本歌曲」の輝きへ栄光が見えてくるのではないでしょうか。

当日の交通等について

横浜国立大学への交通につきましては、事前によくお調べのうえ、安全においで下さいますようお願いいたします。詳しくは例会案内をご覧下さい。宿泊につきましては、横浜駅周辺のほか、新横浜駅周辺も便利とのことです。なお、昼食は各自ご持参下さい。

平成 24 年度
「歌の集い」開催予定

「ラテン系・ドイツ系・日本作品・その他」
2012年11月23日(金・祝)
スタジオ・ヴィルトゥオージ(新大久保)
開演: 午後3時(GP:午後1時~2時半)80席
入場券■ 2000円

「声楽アンサンブル&合唱(ジャンルは自由)」
2013年3月1日(金)
会場: 日本福音ルーテル東京教会(新大久保)
開演: 午後7時(GP:午後3時~6時)200席
入場券■ 2000円

詳しい情報を随時ホームページにて公開しております。ご覧下さい。

コンサート案内

レクイエムの集い
～J.S.バッハの真作、偽作による～
バッハ・カンタータ第１０６番　ほか

2012年11月16日（金）午後7時開演
東京カテドラル聖マリア大聖堂

A.淡野弓子
T.ツェーガー・ファンダステーネ
Br.淡野太郎
B.小家一彦
ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京
古楽シンフォニア・ムシカ・ポエティカ
指揮　淡野太郎

入場券■4000円／2500円（学生）
マネジメント：菊田音楽事務所
TEL　FAX　０４２－３９４－０５４３
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ムシカ・ポエティカ特別公演
ベートーヴェン《第九交響曲》
メンデルスゾーン《詩編》

2013年1月14日（月・祝）午後２時開演
新宿文化センター大ホール

S.佐竹由美
A.永島陽子
T.ツェーガー・ファンダステーネ
B.浦野智行
メンデルスゾーン・コーア&ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京
シンフォニア・ムシカ・ポエティカ
指揮　淡野太郎

入場券■4000円／2500円（学生）
マネジメント：菊田音楽事務所
TEL　FAX　０４２－３９４－０５４３
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

淡野弓子／小林道夫［歌曲の夕べ］
マーラー「さすらう若人の歌」ほか
モーツアルト／シューベルト／シューマン／ブラームスの歌曲

メゾ・ソプラノ.淡野弓子
ピアノ.小林道夫

2013年2月4日（月）午後７時開演
東京文化会館小ホール

入場券■5000円／2500円（学生）
マネジメント：アレグロミュージック
TEL　03(5216)7131　FAX　03(5216)7130
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

川上勝功／塚田佳男
東京室内歌劇場横浜公演
「にほんのうたin横浜」
～さようなら２０１２年～

２０１２年１２月２７日（木）午後５時開演
横浜開港記念会館

バリトン：川上勝功，他
ピアノ：塚田佳男，他

入場券■３５００円
マネジメント：東京室内歌劇場
TEL　０３（５６４２）２２６７
FAX ０３（５６４２）２２６８

お知らせとお願い

新ホームページ開設

幹事　相川修一

このたび、かねてから会員各位からの、内容のより一層の充実と更新スピードアップの要望に応えるため、本学会事務局直営のホームページを開設いたしました。

以前の内容は全て移行しました。さらに、新情報も続々掲載しております。最新情報を随時掲載していきますので、チェックして下さい。これらの蓄積により、本学会の記録としての側面ももつことにもなります。

パソコンからの閲覧はもとより、スマートフォンでの表示も見やすいように工夫してあります。（スマートフォンからPC版を閲覧することも可能です）

各種お知らせ、申し込み書式、学会通信、例会等当日の資料などがダウンロードできるようになります。例会当日、案内の残部はないか、欠席者分の資料を預かりたい等の問い合わせが窓口に多くよせられますが、印刷部数の関係で、応じかねることもありました。これからは、案内、資料等、ダウンロードできるように整備しますので、ご利用下さい。スマートフォン他、携帯端末をお持ちの方は、紙を持ち歩かなくても済むという利便性にもつながります。

このたびの移行に伴い、メールアドレスも変更いたしました。送られてきたメールは、事務局員が定時チェックし、関係各位に連絡するようになっています。なお、旧メールアドレス（hotmail)は廃止いたします。

ぜひご覧いただきまして、忌憚なきご意見をお寄せ下さい。より一層発展、改善させるべく、努力していく所存です。

新ホームページアドレス
http://www.jars-voice.com

新メールアドレス
jars@jars-voice.com

管理者

理事長	米山文明
事務局長	川上勝功
広報部長	豊田喜代美
作成責任者	小川昌文
実務担当	相川修一
事務局員	工藤真理子

＊旧ホームページは、池田京子監事のお骨折りと信州大学のご厚意により、委託の形で運営にご協力いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

↑新ホームページTOP画面

会費納入のお願い

未納の方は早急にお振込下さいますようお願いいたします。

お振込先

ゆうちょ銀行
　口座番号　00170-0-119920
　加入者名　日本声楽発声学会
三菱東京ＵＦＪ銀行　津田沼支店
　普通預金 0393943
　口座名 日本声楽発声学会　米山文明

会員の連絡先について

次の方々の住所が不明です。お分かりの方は事務局迄お知らせ願います。

青野麻美　尾友佳子　北嶋信也
牧野成史　村元彩夏　（敬称略）

事務局だより

米山理事長のごあいさつにありますように、当学会は来年（平成２５年）５月の例会に向けて、会長及び理事の選挙を行うことになっております。新しく定年制を設けたり、理事長が会長になったりといろいろと変わりました。会員の皆様には、改訂された新規約につきまして、今年度発行された学会誌第３号に掲載され、既にお読みになっておられることと思いますが、新しい選挙に関する事項は、前倒しで今年度中に実施されることになっております。只今、数名の理事による選挙準備委員会によりまして、粛々と準備が進められております。選挙日程もほぼ決まりまして、その内に皆様のところに選挙に関する詳細と投票用紙が届くことになります。まずは、規定に正しく従っていただくことと、私達日本声楽発声学会の将来を担っていただく会長、理事を選ぶわけですから、できるだけ多くの方、というよりも選挙資格のある方全員に投票をお願いしたいと思います。今までの選挙の投票率はあまりにも低かったです。会員の皆様のご協力どうぞよろしくお願いいたします。

学会誌への投稿をお待ちしております。投稿の際には研究発表規定をお読み下さい。投稿締切りは２０１３年１月３１日です。また、学会通信にも会員各位の演奏会、出版、CD制作や近況等についてお寄せ下さい。こちらの原稿締切りは２０１３年３月１０日迄です。

事務局長　川上勝功

２０１２年１０月２３日

日本声楽発声学会　学会通信　第２３号

発行　日本声楽発声学会事務局
東京都世田谷区東玉川1-11-26
TEL/FAX　03-3727-5822
e-mail :jars@jars-voice.com